

ザッツ・エンタテインメント：BenthamからFoucaultに至る監視原理

George Orwellが1949年に1984 (『1984年』) という反ユートピア思想的小説を出版した当初、そこに描かれている全体主義国家が1984年に出現していることはないであろうと多くの人々は考えた。一方、鉄のカーテンの両側で既にそのような社会が現れつつあると考えた人々もいた。

1949年以来、我々はOrwellが1984で描写した悪夢の世界を上回るものを体験している。Orwellの時代には (そして物語に投影されている時代には)、個人を押しつぶそうとする権力は国家の手中にあり、Winston Smithは明らかにその力がどこから来ているのかを理解していた。現代では、ある共同体 (それが、学校であれ、街であれ、市であれ、いわゆる地球村であれ) の中における個人間の希薄な関係が完全に個人の生活を破壊する可能性がある。

Orwellの1984において国家が権力を行使する主な方法は監視によるものである。そこに描かれた未来世界では、今日と同じようにカメラが監視という仕事を担っている。しかしながら、その根底にある、権力を表現する一手段としての監視原理は実はCCTV(クローズドサーキットTV)よりもっと古いのである。

本稿では、まずJeremy Benthamのパノプティコン(一望監視施設)とコントロールの手段としての監視原理について考察する。そして、Foucaultがどのようにその監視原理を現代社会に適用し、展開させていったかについて論じる。最後に、いかに監視がコントロールと娯楽、両方の手段として社会全体に普及しているかについてとりあげる。

癩病患者隔離施設とペスト

Jeremy Benthamは規律的な権力様式としての監視原理について明確に論じた最初の人物であるが、批評家Michel Foucaultは中世におけるペストへの対処方法にその始まりを見ている。ペストが起こる以前のやり方は、村、町、市から病気の人々を排除するというものであった。つまり癩病患者隔離施設が誕生したわけである。政治的にいう国外追放と同じである。遠くに隔離しておけば、感染者が病気や思想でより多くの人々に害を与えることはないだろうと考えられた。

中世、社会は病気の人々を各自の家に隔離し監視し始める。これは二つの理由からである。一つはペストの規模の大きさである。あまりに多数の人々が様々な接触伝染病に冒され、もはや社会から病人を追い出すことは事実的に不可能となった。もう一つの理由は、一生涯続くと考えられていた癩病とは異なり、人々はペストから回復したことである。社会は病気の蔓延を食い止めるために病人を共同体の中で隔離し、監視した。監視者たちに、もう疫病を患ってはいないことが明らかになれば、それら回復した人々は、自宅を出ること、つまり社会に復帰することを許された。

Foucaultの*Discipline & Punish* (『監獄の誕生』)によると、これが病院と現代の刑務所の始まりであった。病院では、病人が一つ屋根の下に集められ、他の多数の人々が属する社会から隔離される。彼らは良くなるまで監視され治療を施される。病気から回復すれば社会に復帰できる。

現代の刑務所は宗教改革後、同様に機能し始めた。中世において通常、投獄は、地下牢に人をいれ、「鍵を捨てさる」ことであった。懲役が罰であった。更正がそこに含まれることはほぼなかった。加えて、ほとんどの囚人たちは更正するほど長くは生存しないと考えられていた。

宗教改革とともに、罪を犯した人々は病気であり、更正および改心させてやる必要があるという考えが生まれた。病院にいる人々は身体的に病気である一方、牢獄にいる人々は、精神的に、つまり魂が病気であると。適切な治療を施せば、彼らもまた看病の末、健康な状態にもどるであろうと考えられた。

パノプティコン (一望監視施設)

次に、Benthamである。四年後に *Panopticon* として出版されることになる、1787年に書かれた一連の手紙の中で、Jeremy Benthamは「中心監視原理」を次のようなデザインの形で初めて発表した。そのデザインとは、数階建ての丸い建物で、監視台が中央にあり、まるで車輪のスポークのように独房が中心から放射状に広がっているものである。Benthamによれば、健康、更正、教育、および生産性を向上させる最善の方法は、それが患者であれ、囚人であれ、学生であれ、労働者であれ、人々を絶えず監視下に置くことである。看護婦、看守、教師、上司が不在時にはいつでも、病人の健康状態は悪くなり、犯罪者は陰謀を企み、学生は怠け、労働者は貴重な時間を無駄にした。パノプティコンこそがその解決策であり、それは「感化院、刑務所、労

役所、感染症病院、家内工業所、工場、病院、矯正院、精神病院、そして学校と、どこでも同じようにその目的を達成できる」(*Panopticon* 表題紙)。なぜなら基本原理は同じだからである。その原理とは監視および露見への恐れにより規則遵守が確実にするというものである。

テクノロジーとして機能する建築と幾何学的配置

後にFoucaultが記すように、パノプティコンは、テクノロジーとして機能する建築であり、幾何学的配置であった。「建物と幾何学的配置のほかに他のいかなる物理的道具をも使わずに、その図式はじかに各個人に作用するからであって、それは『精神に、精神をもとにした権力を与える』」¹(206)。Benthamによると、この権力は「『見られることなく見る事ができる』という有名で最も効果的な仕掛とともに、監視役という立場の『中心』」に存在するものであった(44)。

仮に誰も囚人、患者、生徒、労働者がある瞬間に見張っていなかったとしても、彼らは常に見られていると感じるはずである。「監視されている人々はいつも見張られていると感じるはずである、少なくとも見張られている確率は高いと感じるはずである」(44)。

24時間監視の効果をうみだすために、監視長とその家族は中心監視ギャラリーのすぐそばの部屋に居住する。これにより、監視対象者を見張る目が増え、監視される時間が増えることとなるだろう。つまり、勤務時間のみに権威者の注意深い目に曝されるだけではないのである。このパノプティコンでは、24/7（一週間七日二十四時間）という表現が英語の語彙に入る200年前にすでに、誰かを“24/7”見張る可能性がありえたのである。

しかしながら、監視者は看守とその家族に限られない。そこに住み、働く人々以外も監視ギャラリーに入れるようになっている。このギャラリーまたはそれに似たような場所は、チャペルの説教壇としても使われる。教会の礼拝がそのギャラリーのデッキから行われる。また別の時には、一般にも公開される。一般人が存在することにより、その下にいる者たちにパノプティコン的效果を与えることができるだけではない。予告なしに訪問してくる彼らは、看守たち自身にも同じような効果をもたらす。「看守がその事に対し対価の報酬を得ないときでさえ、無償監視のシステムは、それだけで看守に畏敬の念を抱かせ、適切な振る舞いをさせることができる。つまり望みと恐れ

という正反対の衝動が、管理側が完璧に仕事を遂行することに寄与し、管理者の振舞いを義務の最高レベルにまで保つ」(79)。

家族みんなの娯楽

「無償監視」のほかにも、考慮されるべき娯乐的価値があった。監視長とその家族は窓の外を眺める代わりに窓の中を眺めることができる。「それは街にいる特にする事もなく暇な人々……つまり窓の外を見ているような人々には、とても良い、継続的な娯楽の源となる。その風景は外と違って閉鎖的ではあるが、多種多様で、それゆえまんざら面白くないわけでもないだろう」(45)。

一日をどこかで過ごしたい一般の人々にパノプティコンを訪問するよう勧めることも出来る。「もし仲間を誘えるなら、ロンドンにある保護施設、売春婦更正院や性病病院と同じように、それ[監視デッキ・礼拝の間は説教壇になる]を仲間で埋めよう。そこでの光景はより目をひき、きっと同じぐらい興味深く、哀れだろう」(78)。

Paul Strathernが記しているように、Benthamはこの種類の監視を娯楽の一形式として分類した唯一の人物ではなかった。「狂人などの様子を眺めることが国民的な娯楽になってしまったのである。拘束された人間がむち打たれる様子を眺めることが！ロンドンのベツレヘム精神病院を例にとろう。毎年、実に九万六千人もの人間が訪れていた²（この‘Bethlehem’（ベツレヘム）という言葉が崩れて‘bedlam’（精神病院）となった……）」(15)。

Foucaultが展開した監視原理

アメリカ、ニューヨーク州北部にあるアッティカ重罪刑務所を訪れた三年後の1975年に、Michel Foucaultは *Discipline & Punish: The Birth of the Prison* (『監獄の誕生—監視と処罰』)を出版した。興味深い事に英国はBenthamが言うレンガとセメントでできた刑務所のデザインを見るには最善の場所ではなかった。Benthamは例の議論について、少なくとも英国においては、ニューサウスウェールズに敗北をきしてしまったせいである。

オーストラリア人には、次の話は有名だろう。18世紀終わり、イングランドの刑務所と労役所はあふれかえっていた。有罪判決を受けた者たちをニューサウスウェールズの植民地に船で送ってはどうか？それにより過密状態が緩和されると同時にその遠い地を殖民化する助けにもなるだろう。

ペストの時代における自宅隔離に代わり、ニューサウスウェールズの一部が、犯罪者のための「癩病患者隔離施設」の一種として機能することになるのだ。しかし、それだけではなかった。この計画の多くの支持者たちは全ての罪人は二回目のチャンスが必要としていると考えた。新しい土地でまた最初から人生を立て直す新たなチャンス。

Benthamは、もちろん、当初からこの遠隔刑罰植民地の考えに反対であった。彼が1802年にペラム卿に送った “Panopticon versus New South Wales: Or, The Panopticon Penitentiary System, And The Penal Colonization System, Compared” (「パノプティコン対ニューサウスウェールズ—パノプティコンパノプティコン 刑務所システムと刑罰植民地システムの比較」) というタイトルの手紙の中で、Benthamはニューサウスウェールズ計画よりもパノプティコン・システムがより好ましい理由を列挙した。そのうち最も主たるものは、極めて重要な監視の原理が刑罰植民地システムには欠けているというものであった。監視することなしに、一体どのように真の更正をもたらす事ができるのか？一体どうやって、ニューサウスウェールズを自由に駆け回る人々を見張ることができるというのか？

Benthamはこの議論に負け、英国はパノプティコンを建設しなかった。アイルランドにパノプティコンを立てるという計画も実現されずに終わった。一方でアメリカが、イリノイ州ジョリエット近郊のStateville Prisonを含む、パノプティコンにヒントを得た建物をいくらか建設した。

*Discipline & Punish: The Birth of the Prison*を執筆中、Foucaultが発見したのはBenthamが何の心配もする必要なかったということである。20世紀終わりには、Benthamによる「パノプティコン」の建築的デザインは、社会における人間関係のモデルとなっていたのである。「<一望監視施設 (=パノプティコン)>は、一般化が可能な一つの作用モデルとして理解されなければならない。人間の日常生活と権力との諸関係を規定する一つの方法として、である。なるほどベンサム (=Bentham) はこの施設を、それ自体きわめて閉鎖的な特定の仕組として提示している。…… そうはいつても、この施設は一種の夢幻的な建物として理解されてはならない。というのは、それは理想的形式に縮約された或る権力機構の図解だからであって、……」³ (205)。

今や社会中に普及した監視

Foucaultによると、コントロールの手段としての監視は既に社会全体に普及していた。それはもはや国家だけが持つ権限ではなかった。「規律的な方式の普及は、閉鎖的な施設という形の中だけではなく、社会全体に散らばっている監視の中心地として見出すことができる」⁴ (“Panopticism” 212)。

Orwellの1984では、国家は情報を広めテレスクリーンを稼働させて思想警察の情報収集の仕事を監視した。現代では国家には多くの助けがある。「かつては見るための機械仕掛は、その中を個人がこっそりうかがえるような一種の暗室であったが、今やそこで権力の行使を社会全体が監視できるような透明な建物となった」⁵ (“Panopticism” 207)。

CCTV(クローズドサーキットTV)

監視が社会全体に広まった一つの方法はCCTVカメラの使用を通じてである。CCTVカメラは今や、アデレード大学も含め、先進国全体のほとんどの公共の場に存在する。安全のためという理由で、すべての施設、会社および土地の所有者は、その敷地内や周囲にカメラを設置することができる。それは安全のためだと私たちは知らされている。監視カメラは犯罪に対する抑止効果がある。犯罪行為が起こった場合、監視カメラに写っている映像は法廷でも使用することができる。

データ収集

Foucaultが「階層秩序的な監視」⁶と名付けたもののほかに「連続的な帳簿記入や常時おこなわれる判断と分類」⁷つまりデータ収集と我々が呼ぶところのものがある(220)。会社は商品やサービスを届け、支払いを得るのにある種の情報を知る必要がある。企業は、販売量を増やすために客が何を購入しているのか知りたがっている。子供が二人いれば、生命保険が必要かもしれない。ある程度のお金を稼いでいるのであれば、革製ブリーフケース市場の潜在的な客ともなりえよう。

このデータ収集のいくらかは十分無害に見えるし、そして実際のところ無害なのだろう。しかし、この種の情報が他の情報源と照らし合わされれば、Foucaultが「人々の行為や態度や潜在的性質や疑わしい点である—個々人の行動について常時おこなわれる考察」⁸と記すところのものを登録するデータベースとなりえる(“Panopticism” 214)。

監視とコントロールを行うことができる新テクノロジーの到来

OrwellとFoucault両氏が予測したのは未来のテクノロジーが個人に対するパノプティコン的効果を増すであろうということである。1984に描かれた悪夢の世界において「テクノロジーの開発にしたところで、その製品が人間の自由を縮小する為に用いられることが可能な場合にのみ、実行に移されるといった具合だ。全ての有用なテクノロジーに関して、世界は停止している、もしくは退歩しているのである」⁹ (Orwell 198)。テレビがその一例である。「テレビが開発され、技術の進歩によって、ひとつの機器で受信と発信が同時にできるようになると、私的な生活といったものは終わりを告げるようになった」¹⁰。

とても興味深いことに、Foucaultは1984年に死亡した。それ以来、別の「技術上の小さい発案の総体」¹¹ が権力という「多様なもののもつ活用可能な成果を増大させる」¹² までに至った (“Panopticism” 220)。2010年、我々はOrwellとFoucaultが悪夢においてしか見ることができなかったテクノロジーを得たのである。最新のコンピューターを所有している人間は誰でも「同じ道具で同時に、受信し送信できる」。Google (グーグル)やYahoo (ヤフー)のような検索エンジンは個人の行動について莫大な量のデータを収集し、無数の方法でそれらを相互参照することができる。GPSやSIMカードのテクノロジーは一週間のどの日でも人の所在を正確に指摘することができる。Google Street Viewは家とその近所も網羅している。ほとんどの携帯電話にはカメラ機能がついている。多くはビデオやインターネット機能も搭載している。最新の携帯電話を持っていれば、誰でも即座に報道写真家、パパラッチ、Orwellの小説というアマチュアスパイになれるのである。

現代における娯楽としての監視

ここまで、Benthamが定義し、Orwellが小説化し、Foucaultが展開してきた監視原理が現代社会においてどう機能しているかについての例を幾らか提示してきた。さあ、ここで述べたいのはパノプティコン的効果が娯楽として提供されていて、これが群をぬいて最も憂慮すべき傾向であるということである。

集団娯楽としての苦しみは何も決して新しいものではない。古代で最も有名な例としてローマの円形競技場がある。多くの人々が人間をライオンへと放りなげる情景を楽しんだ。エリザベス時代に、クマいじめという“sport” (娯楽) が広まった時代も、状況は代わり映えしていなかった。18、19世紀には、前述したように、精神病院を訪問することは一般的な娯楽の一

つであった。英国では、公衆の面前での絞首刑は1868年まで禁止されていなかった。リンチは20世紀になってかなり経つまで非合法ではあったが、アメリカの多くの場所で半公的な催しものであった。

Orwellの1984において、苦しみを娯楽として包装し、市場に出したのは国家であった。

「一九八四年四月四日。昨夜、映画に行く。すべて戦争映画。とてもいいのが一つ。避難民で溢れかえっている船が地中海のどこかで爆撃される。観客がひどく喜んだのは、とてつもなく太った大男がヘリコプターに追われ、泳いで逃げようとする一連のショット。最初はイルカのように水中をのたうちまわる姿。一転してヘリコプターの照準器が捉えた彼の姿。次の場面では彼の身体中じゅうに穴があき、周囲の水がピンクに染まる。そしてその穴から水が注入されたみたいに、彼は突然沈んでいく。観衆はその沈む姿を見て大笑い」¹³ (8)。

今日大きく異なる点は、人々が苦しみを喜んで見ているということではなく—というのも我々はいつだってそれを楽しんできた—我々の多くが無意識のうちに苦しみを提供する人物となっていることである。我々は放送中で、苦しみと嘲笑を放映しているのである。

携帯電話とアマチュアビデオ

2010年、最新の携帯電話を持っている者は誰でも、堂々とあるいはこっそりと、彼らがinteresting (面白い)、つまり、compromising (秘密暴露的) (二語はますます同義語のようになってきている) と思う場面での人々の画像を捉えることができる。わずか数秒で、画像はYouTubeといったウェブサイトやプラットフォームに投稿される。そこでは、何百万人もの人々がある場面が撮影された時と同じように、それを見、聞くことができる。そのワンシーンの前後の出来事や発言は重要ではない。ほとんどの場合、背景や状況は存在しない。クマをいじめている犬の場面はないのである。犬はカメラには映っていない。重要な場面はクマがその歯をむき出しにして前に向かっていところか、倒れるところである。それこそが、我々がテレビで見たい場面であり、インターネットで見たい場面である。さあ行って、それを録ってこい—必要ならそれを演出しろ—なんせ録ってこい。

娯楽としてのCCTV監視カメラ

Rubert Sheldrake の *The Sense of Being Stared At* でインタビューされたある警備員の話によると、CCTVカメラのテープをチェックすると一つ面白い点があるらしい。「『見られていると知っている人々がいる。たいていは、犯罪者だが。彼らはカメラを見つめる。彼らは不安げにそわそわして、うろうろ歩く。彼らはカメラの視線から逃れようとする。見上げる。時にそれは滑稽である』」(144)。

あるエリア内に監視カメラがあると一般市民に注意を呼びかける警告サインを除いては、CCTVカメラの映像が安全目的以外では使用されないと保証するものは何もない。言いかえれば、CCTVモニターの裏側にいる者は誰でも、それが異常であると思えば、ある人の行動をテープを巻き戻して見ることができる。もし面白いと感じれば、同僚と一緒にそれを見て笑うであろう。もしセキュリティが十分いい加減であれば、家族や友達と楽しむこともできる。法を犯す気であれば、その映像を *YouTube* に投稿しさえすることもできる。

Orwell の *1984* では、注目を引いたのは異常さであった。「神経性の顔面チック、無意識のうちに出る不安げな様子、独り言を口にする癖など一つまりは、異常性を感じさせるもの、何か隠し事をしていると感じさせるものはすべて危ない。何しろ、顔に不適切な表情を浮かべること(例えば、勝利が発表されたときにそれを疑うような表情を浮かべること)それ自体が罰せられるべき罪なのだ。ニュースピークではそれを表わす罪名まで付いていた—<表情犯罪>」¹⁴ (64)。今我々には *Facebook* がある。

***Facebook* などのソーシャルネットワークワーキングサイト**

日常的に行われるデータ収集やCCTVカメラによる監視と同様に、ソーシャルネットワークワーキングサイトで入手可能な情報の多くは、全く無害に見える。多くの場合、それは単に趣味が悪いかどうかの問題である。が、それでも、これらのサイトには、風変りな人々、異様な人々、奇妙な人々にフォーカスする傾向がみられる。

どういうわけか、世界の人々は人が鼻をほじっている姿を見たいのである。人が鼻の穴に指を突っ込んでいるのを見るのは面白い。残念ながら、また同様に人々はオリンピック選手がマリファナ用の水パイプを吸っているところを見たいし、政治家が売春婦と一緒に、あるいは売春婦なしで、コカインをやっているところを見たいし、誰かが配偶者でない人と一緒にいるとこ

ろを見たいのである。誰かの恥ずべき場面や墮落の場面を目撃することは面白いのである。特にそれが、有名な人物である時には。

養護施設のギャラリーの時代には、誰も“tagged”(「タグ付け」)されていないかった。ベツレヘム精神病院を訪ねた際、人々が見たものはなんであれ、それらについて、人々は話すことはできたが、それだけだった。観察されている対象が亡くなる前に、そのイメージ(画像)は消え去った。なぜなら、隅で眠っている人間は、自分の汚物を壁に向かって投げる誰かを見るほどは娯楽の対象として面白くないからである。

今日、画像は消え去ることがない。人々はそれにコメントし、印刷し、保存し、友人に送ることができる。それが公正なことであるかどうかは問題ではない。公正さは無関係なのだ。問題なのは面白いか否かである。その画像には、怖れ、混乱、不安定さ、または弱さが表れているか？その画像は、誰かを貶めたり、恥かかせたりするのに利用できるか？気に入った？それとも却下？さあ票を投じよう。

権力とコントロールとしての嘲笑

誰かを笑ったり、からかったり、あざけるということは権力とコントロールの行使である。さらなる嘲笑的となることを避けるために、その対象である人物は行動を修正しようと試みる、つまり、その人物をコントロールしているのである。Foucaultが述べた「技術上の小さい発案」は今や社会全体に娯楽として広まっている。我々はもはやショーを楽しむために円形球技場や村の共有草地に行く必要はない。苦しみという娯楽は私たちのコンピューター上で、電話上でさえ、放映されている。

我々は苦しみという娯楽を受動的に楽しむだけの消費者という立場をとつくに超えてしまっており、もはやOrwellのビッグ・ブラザーやハリウッドさえをも非難できる立場にはない。我々の多くがこの「娯楽」を自ら生み出しているのである。その「娯楽」を利用して他者を傷つけているのである。そして、その他の者たちはそれが行われるのを立って見ているだけである。

メルボルンの喫茶店から、ニューサウスウェールズ、シカゴ、日本の学校に至る共同体の中で、娯楽としての監視は人々の生活をコントロールし、完全に破壊するために利用されている。人を自殺にまで至らしめることもある。ほとんどの場合、犯罪性は関わっていない。というのも、起こったのは娯楽だからである、殺人でも、過失致死でも暴行でもない。娯楽である。

人々は楽しんでいたのである。誰も人を傷つけるつもりはなかった。誰もが“sticks and stones may break your bones, but words can never hurt you”（「棒や石で打たれば骨が折れてしまうけれど、言葉で人を傷つけることはできない(から平気だ)」)と知っている。彼らが理解していないのは、文字通信、ブログ、そしてYouTubeのビデオクリップは、人を死に追いやることがあるということである。その人物が、日本の財務大臣であれ、マサチューセッツ州ハドレーの高校生であれ。

結論

Benthamはパノプティコンを「夢の建物」と考えていたのだろう。Orwellにとってのパノプティコンはテレスクリーンであって、それと共に「私生活は終わりを迎えた」(211)。Foucaultはそれが社会全体に行きわたる権力のメカニズムだと正しく指摘した。「龐大であると同時に小型である仕掛であり、権力の不均衡をささえ、強化し、多様にし、しかも権力の不均齊にたいして示された制限を無用にする仕掛」¹⁵であると(“Panopticism” 223)。

かつて周りに建物として存在していたこの信じられないくらい強力な仕掛を今や我々はナップサックやカバンの中に入れて持ち歩いているのだ。たった5分ほどで、画像の断片をつなぎ、放映し、世界中に我々が見たものや聞いたものを流すことができる。しかし、クリスマスプレゼントに新しい虫眼鏡をもらった子供のように、我々全員がまずそれでしてみたいことは蠅の羽を焼き切ることなのである。

© 2010 Charlie Canning (訳者: 田岡千明)

訳者注

- 1 ミシェル・フーコー (田村俣訳) 『監獄の誕生—監視と処罰』208頁(新潮社, 1977)
- 2 ポール・ストラザーン (浅見昇吾訳) 『90分でわかるFoucault』42頁(青山出版社, 2002)
- 3 フーコー・前掲注(1) 207頁
- 4 同上213頁参考
- 5 同上209頁参考

- 6 同上220頁
- 7 同上220頁
- 8 同上 215頁
- 9 ジョージ・オーウェル (高橋和久訳) 298頁 『1984年』 (早川書房, 新訳版, 2009)
- 10 同上315-316頁
- 11 フーコー・前掲注 (1) 220頁
- 12 同上220頁
- 13 オーウェル・前掲注(8) 17頁
- 14 同上 96-97頁
- 15 フーコー・前掲注(1) 223頁参考

引用文献

“Australian state bans *YouTube* in schools to stop bullying.” *Daily Yomiuri*

6 Mar. 2007: 18.

Bentham, Jeremy. “Panopticon; Or, The Inspection-House.” *Jeremy Bentham’s*

Works, Vol. 4. Ed. John Bowring. Edinburgh: William Tait, 1893, 37-172.

---. “Panopticon *Versus* New South Wales.” *Jeremy Bentham’s Works*, Vol. 4.

Ed. John Bowring. Edinburgh: William Tait, 1893, 173-248 [First

Letter To Lord Pelham, pp. 173-211; Second Letter To Lord Pelham,

pp. 212-248].

“Cell phone obsession leads children into a ‘scary world.’” *Daily Yomiuri*

12 Jan. 2008: 4.

“Colombian town’s anti-gossip law has tongues wagging.” *Daily Yomiuri*

16 Oct. 2007: 21.

“Distraught father loses daughters, then reputation in media circus.” *Asahi Shimbun*

13 Dec. 2007: 21.

- Durkheim, Emile. *The Division of Labour in Society*. London: Macmillan Ed., 1984.
- . *Suicide: A Study in Sociology*. Trans. John A. Spaulding and George Simpson. London: Routledge & Kegan Paul, 1952.
- Foucault, Michel. *Abnormal: Lectures at the College de France 1974-1975*. London: Verso, 2003.
- . "Panopticism." *Discipline & Punish: The Birth of the Prison*. Trans. Alan Sheridan. New York: Vintage, 1977. 195-228.
- . *Politics, Philosophy, Culture: Interviews and Other Writings 1977-1984*. Trans. Alan Sheridan et al. Ed. Lawrence D. Kritzman. New York: Routledge, 1988.
- . "Power and Norm: Notes." *Michel Foucault: Power, Truth, Strategy*. Sydney: Feral, 1979. 59-66.
- "Gang Stalking in Japan." *Gang Stalking in Japan*. 31 Oct. 2008
<http://stalker.client.jp/gangstalking.html>.
- "Girl commits suicide, blaming insults on blog." *Daily Yomiuri* 2 June 2008: 2.
- "Girl's suicide thought linked to online bullying by classmates." *Daily Yomiuri* 20 Jan. 2009: 2.
- "Girls lead rise in complaints of libel on Net." *Asahi Shimbun* 17 Jan. 2008: 21.
- Kroehn, Chantelle. "YouTube brawl girls suspended." *Southern Times Messenger* 23 June 2010: 5.
- Miyamoto Masao. *Straitjacket society: An insider's irreverent view of bureaucratic Japan*. New York: Kodansha, 1994.
- Murai Masami and Watanabe Mitsuhiko. "School bullies increasingly tormenting victims online." *Daily Yomiuri* 20 Nov. 2007: 4.
- "Net anonymity spurs abuses." *Daily Yomiuri* 4 Nov. 2005: 4.
- "Net defamation hits record high in '06." *Daily Yomiuri* 30 Mar. 2007: 2.
- "New form of bullying by e-mail on rise." *Daily Yomiuri* 19 July 2008: 2.
- "online bullying." Language Connection. *Daily Yomiuri* 27 Jan. 2009: 19.

- “Online defamation.” Views from Abroad. *Daily Yomiuri* 20 Apr. 2009: 4.
- Orwell, George. *Nineteen Eighty-Four*. Centennial Edition. New York: Plume, 2003.
- Penn, WM. *The Couch Potato's Guide to Japan: Inside the World of Japanese TV*. Sapporo: Forest River Press, 2003.
- “Osaka Pref. to ban mobile use in schools by March '09.” *Daily Yomiuri* 5 Dec. 2008: 2.
- “Police in bind over defamation on blogs.” *Daily Yomiuri* 4 Apr. 2009: 3.
- “Poll: Half of student websites contain insults.” *Asahi Shimbun* 17 Apr. 2008: 25.
- Reich, Wilhelm. *LISTEN, LITTLE MAN!* New York: Noonday, 1948.
- Sheldrake, Rubert. *The Sense of Being Stared At*. New York: Crown, 2003.
- Strathern, Paul. *The Essential Foucault*. Virgin Philosophers Series. London: Virgin, 2002.
- “Survey respondents say human rights abuses, slander rising.” *Daily Yomiuri* 27 Aug. 2007:2.
- “Teen arrested in bat attack over dispute on website.” *Asahi Shimbun* 24 Apr. 2008: 23.
- “Teen Web site slander spinning out of control.” *Asahi Shimbun* 9-10 Feb. 2008: 21.
- “20% of 38,000 student Web sites abusive.” *Daily Yomiuri* 15 Mar. 2008: 1.
- “U.S. students post videos of schoolyard fights online.” *Japan Times* 8 Mar. 2009: 5.
- “Web-related rights violations increasing.” *Daily Yomiuri* 4 Nov. 2005: 4.